

『助言』における表現選択と意図の伝達：相互作用過程とコンテキストからみた談話分析

著者	鹿嶋 恵
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	11
ページ	106-94
発行年	2000-06-25
その他のタイトル	Expression Choices and Communication of Intention in Giving Advice : Discourse Analysis from the Interaction Process and Context
URL	http://hdl.handle.net/10076/6561

『助言』における表現選択と意図の伝達 —相互作用過程とコンテキストからみた談話分析—

Expression Choices and Communication of Intention in Giving Advice:
Discourse Analysis from the Interaction Process and Context

鹿嶋 恵
KASHIMA, Megumi

1. はじめに

我々が現実の言語運用場面で『助言』を行う時には、ある特定の表現を用いて行っている。しかしながら『助言』意図を伝達するためには、様々な表現が可能である。例えば、下記(1)の→で示した『助言』表現は、「先に銀行に行くべき」という話し手Bの意図を伝えていると考えられる。同じ意図は、(2)や(3)の→で示したような発話によっても、伝えることが可能であろう。

(1) (横断歩道を渡りながら。A=女 23 才、先輩。B=女 21 才、後輩。¹⁾)

A: 買物に行った方がいいと思う? 銀行に行った方がいいと思う?

→B: 銀行に行ってお金をおろしてから、買物に行った方がいいですよ。

A: そうだね。(銀行に向かう)

(2) (内省)

A: 買物に行った方がいいと思う? 銀行に行った方がいいと思う?

→B: お金が足りないと困るでしょう。

(3) (内省)

A: 買物に行った方がいいと思う? 銀行に行った方がいいと思う?

→B: 十分お金を持っている方が安心ですよ。

上記(1)~(3)の→の発話には、遂行動詞(「助言する」)が含まれてないため、Searle (1969, 1975) のいう間接的発話行為(indirect speech act)に相当すると考えられる。しかしながら、彼が提唱するように遂行動詞を含まない発話文を間接的発話行為とすれば、日本語の『助言』の場合、ほとんどが間接発話行為となってしまうであろう。また、日本語母語話者としては、(2)(3)と比較すれ

¹ 本稿でデータとしたのは、日本語の自然会話とTVドラマの会話、および英語(米語も含む)の映画の会話である。データの詳細については、本稿3.を参照。自然会話の例には特にその旨を記さないが、TVドラマと映画によるものには当該タイトルを記した。また、データによらないものは(内省)と記した。

ば、(1) ははるかに直接的な表現と感じられよう。これらの間接性には明らかに度合に差があり、同じ間接性を示しているとは言い難い。このような間接発話行為に関する問題点は、既に多くの議論に上ってきた (cf. Levinson 1983, 熊取谷 1990; 1993; 1995, Flowerdew 1990)。

他方、『助言』は話し手の現状認識・判断に基づいて遂行される。しかしながら、その認識・判断は、必ずしも全て“表現化”されるとは限らない。ここで問題となるのは、表現化されない『助言』意図が、聞き手と話し手との間でどのように認知されるかという点である。

本稿では、『助言』表現の選択がいかに行われ、その『助言』意図が話し手と聞き手の間でいかに認知されているかを、2人のおかれていたコンテキストおよび相互作用の過程に位置づける視点から、明らかにすることを試みる。

2. 日本語における『助言』の語用論的構造と伝達方略の類型

『助言』という発話行為については、既に熊取谷・村上 (1992) が語用論的性格、語用論的構造、伝達方略の類型について分析を行っている。彼らの基本となる考え方は、日本語の『助言』には3つの構成要素の組み合わせからなる語用論的構造が存在し、現実中存在する多様な『助言』表現は、その語用論的構造から派生する7種の類型に集約できる、というものである。

彼らは『助言』という発話行為を「話し手 (助言の送り手) の現状認識・評価に基づき、聞き手 (助言の受け手) が現在もしくは将来おかれる状況 ($S1$) を、聞き手の行為 (X) によって、より望ましい状況 ($S2$) に変えさせようとする意図の元に遂行される発話行為」と規定する。このような『助言』は、上記の状況「 $S1$ 」「 $S2$ 」、および聞き手の行為「 X 」の3つを構成要素とした、『助言』のプロトタイプともいうべき語用論的構造 (“Do X for $S2$ because $S1$ (is not desirable).”) を持つと考察されている。

また彼らは、現実の談話場面に存在する多様な表現を、話し手が『助言』の意図を伝達しようとするための伝達方略の現れと見る。すなわち、『助言』の語用論的構造を構成する3つの要素 ($S1$ 、 $S2$ 、 X) をいかに組み合わせて提示するかという工夫を、『助言』の伝達方略と見る。これによって、多様な『助言』表現は、7種の類型 (X の提示、 $S1$ の提示、 $S2$ の提示、 $X+S1$ の提示、 $X+S2$ の提示、 $S1+S2$ の提示、 $X+S1+S2$ の提示) で説明可能となる。

この枠組みに基づいて、今一度、上記(1)~(3)の例を見てみよう。(1)で話し手Bは、→で示された発話「銀行に行ってお金をおろしてから、買物に行った方がいいですよ。」を行っている。これは聞き手Aに行為 X を示していることが

ら、「 X の提示」と見ることができよう。(2)での「お金が足りないと困るでしょう。」という発話は、望ましくないと判断する状況「 $S1$ の提示」と言えよう。他方、(3)の「十分お金を持っている方が安心ですよ。」という発話は、望ましいと判断する状況「 $S2$ の提示」と考えられる。さらに次の(4)は、聞き手の行為 X と望ましくない状況 $S1$ の両方を提示する「 $X+S1$ の提示」と考えられる。

(4) (内省)

A: 買物に行った方がいいと思う? 銀行に行った方がいいと思う?

$X \rightarrow$ B: 先に銀行に行った方がいいですよ。

$S1 \rightarrow$ お金が足りないと困るでしょう。

3. 『助言』の伝達方略の選択

既に述べたように熊取谷・村上(1992)は、『助言』の意図とは、聞き手が現在もしくは将来おかれる状況を、聞き手の行為によって、より望ましい状況に変えさせようとする事としている。このような『助言』意図を伝達するために、上記のような7種の伝達方略の枠組みが提案されたわけであるが、現実にはどのような選択が行われているのであろうか。

ここで、実際の言語運用における『助言』談話について、特に話し手の発話に焦点を当て、用いられている伝達方略の種類の分布分析を行った。

分析のデータとしたのは、日本語の自然会話における『助言』談話173、日本語のTVドラマの会話における『助言』談話176、および英語(米語も含む)の映画の会話における『助言』談話193である。日本語の自然会話は、筆者がフィールド・ノートを持ち歩き、『助言』と気づいた点で書き留めて収集した。日本語のTVドラマの会話は、ビデオに録画して『助言』場面の談話を文字化した。英語の映画会話は、ビデオ化されたものを見ながら『助言』場面を文字化してネイティブ・チェックを受けたもの、およびシナリオから抜き出したものである(本稿末の「談話収集資料」参照)。

その結果が、次の表1である。この表1を見ると、7つの伝達方略の類型は、決して均等に選択されているのではなく、特定の方略に片寄りがあることがわかる。かつ、その傾向は日本語・英語ともに非常に似通っている。すなわち、最も頻繁に選択されたのは「 $X+S1$ の提示」であり、日本語・英語とも全体の3割前後を占めている(日本語自然会話29.5%、日本語ドラマ会話27.8%、英語映画会話34.7%)。以下日本語・英語ともに、2番目に多いのが「 X の提示」(日本語自然会話28.3%、日本語ドラマ会話19.3%、英語映画会話27.5%)、3

(4)

表1 『助言』の伝達方略の類型分布

伝達方略	日本語自然会話	日本語ドラマ会話	英語映画会話
X	49(28.3)	34(19.3)	53(27.5)
$S1$	21(12.1)	22(12.5)	24(12.4)
$S2$	11(6.4)	4(2.3)	8(4.1)
$X+S1$	51(29.5)	49(27.8)	67(34.7)
$X+S2$	38(22.0)	33(18.8)	34(17.6)
$S1+S2$	1(0.6)	13(7.4)	1(0.5)
$X+S1+S2$	2(1.2)	21(11.9)	6(3.1)
合計	173(100.0%)	176(100.0%)	193(100.0%)

番目に多いのが「 $X+S2$ の提示」(日本語自然会話 22.0%、日本語ドラマ会話 18.8%、英語映画会話 17.6%)と続いている。

こらら上位3つの伝達方略に共通するのは、「 X の提示」が含まれていることである。この「 X の提示」は、聞き手に対してどのような行為をとるべきかを示す行為指示として機能する²。このため、より直接的に『助言』意図を伝達・認知することが可能であり、頻用につながったと考えられる。

他方、単一の構成要素を提示する「 $S1$ の提示」や「 $S2$ の提示」は、日本語・英語ともに選択の頻度が低い。また、その組み合わせである「 $S1+S2$ の提示」や、『助言』のプロトタイプである「 $X+S1+S2$ の提示」は、日本語のTVドラマの会話を除けば³、さらに選択頻度が低かった。

このような、伝達方略の選択に片寄りが生じる背景には、どのような要因が関わっているのであろうか。言い換えれば、ある伝達方略の類型が選択される／されないのは、どのような場合なのであろうか。

この問題を考えるために、話し手と聞き手のおかれているコンテキストおよび相互作用の中で、『助言』がいかに導入されるかという視点から談話分析を行った。すると、大きく次の3つのパターンが浮かび上がってきた。

- 話し手と聞き手の相互作用を前提とする場合
- 聞き手からの構成要素の提示を前提とする場合
- 話し手から一方的に導入する場合

以下順に、これらを具体的に検討していきたい。

² 行為指示が特定表現の慣用性の問題と関連があることは、既に指摘されている通りであり (cf. 山梨 1986, 熊取谷 1995)、綿密な考察が課題である。

³ 日本語のドラマ会話が自然会話に比べて高かったのは、記憶・記録の限界がある自然会話よりも長いやり取りの談話が収集できたことが影響したと考えられる。しかし、英語のデータでも低かったことに関しては、さらに追調査が必要である。

4. 相互作用を前提とする『助言』

熊取谷・村上 (1992: 33-34) は、『助言』発話において表現化されていない構成要素の存在認知には、話し手と聞き手のインタアクション (相互作用) が作り上げるコンテクストが重要な役割を果たすと指摘している。これには、話し手から働きかける場合と、聞き手から働きかける場合がある。具体例を見てみよう。

4.1 話し手から働きかける相互作用

まず、話し手から働きかける相互作用には、例には次の(5)が挙げられている (熊取谷・村上 1992: 33)。また、英語の例には(6)のようなものがある。

- (5) (電話で。Bは指導教官と連絡が取れない。A・B=女 23 才大学院生、友人。)

A : 今、電話掛けてみた?
 (S2) B : ううん、怖くて掛けられないよ。
 A : そうか。

X→ でも、アポイントメントは取っといた方がいいよ。

B : うーん、そうだね。掛けてみようか。

A : うん。

- (6) (Ultimate Sports Bar & Grill. Christy, her fiancé Blaine, and Sully are having lunch. "Switching Channels")

Blaine : (to Sully) Could Christy interviewing Ike Roscoe really
 change the governor's mind?
 Sully : Yes.
 (S2) Christy : Thousand to one.
 Sully : Ten to one. Twelve to one.

X→ Blaine : (to Christy) Well, I think you've got to do it, honey.

S2→ The least we can do is take a later plane.

Christy : W- wait a minute. Don't you see what he's doing? He
 doesn't care about Ike. He just wants a hol lead on the six
 o'clock.

S2→ Blaine : (overlaps) Sweetheart, sweetheart, if it means it could
 save a man's life ...

(6)

(5)で話し手Aが直接遂行している『助言』は、「Xの提示」という伝達方略に見える。しかし、それ以前には、(S1)の部分が示すように、話し手Aが聞き手Bに問いかけて聞き手Bがそれに答えるという2人の相互作用を通してS1が確定されている。また、(6)では、話し手(Blaine)が聞き手(Christy)に「X+S2の提示」という『助言』を行う前に、S1に関して3人でのやり取りが行われている。すなわち、(S2)で示されたやり取りでは、BlaineからSullyに問いかけ、そのSullyの答えに触発されてChristyが自分の考えを述べ、再度Sullyが自分の意見を述べるという相互作用が行われている。この結果、Christyの考えがBlaineやSullyとは異なるというS1が明らかになっている。

4.2 聞き手から働きかける相互作用

次に、聞き手から働きかける相互作用の例には、次の(7)の例が挙げられている(熊取谷・村上1992: 34)。

(7) (喫茶店で食事を終えた後。A=先輩23才。B=後輩21才。)

- (S1) $\left\{ \begin{array}{l} \text{A: 降りそうね?} \\ \text{B: 今日午後から90\%って言っていましたよ。} \\ \text{A: ええ? あたし傘持っていない!} \end{array} \right.$
- (X)→ 一回帰った方がいいかな?
- (S2) $\left\{ \begin{array}{l} \text{間に合うかな?} \\ \text{B: 今ならまだ間に合うと思いますよ。} \\ \text{A: うーん。} \end{array} \right.$

(7)での聞き手から働きかけは、S1、X、S2それぞれについて行われている。このように聞き手からの働きかけによる相互作用の場合、3つの構成要素それぞれに関して生じ得る。そしてそれは、質問もしくは確認の表現形式をとっており、『助言』の要請と認知されやすい。例えば、先の(1)では聞き手Aは、質問形式の発話「買物に行った方がいいと思う? 銀行に行った方がいいと思う?」によって、どう行動すべきかという行為Xを、話し手Bに求めている。これに対して、話し手Bは明示的に「Xの提示」を行っていた。また次の(8)では、聞き手(Scott)が自分の身なりにどこか悪いところがないかという現在の状況S1を、話し手(Boof)に尋ねている。これに対して話し手(Boof)は、直接その質問には答えていないものの、代わりに行為指示「Xの提示」を行っている。

- (8) (Street. Scott and Boof are going back home from school talking. "TEEN WOLF")

(S1)→ Scott : Boof, look at me. Now try and objective. Am I alright?

I mean, is there anything wrong with me?

X→ Boof : (*Looking at him*) You should probably shower after basketball.

Scott : I do.

Boof : Then no.

このように、話し手と聞き手がお互いにやり取りして確定した構成要素は、改めて話し手が言及する必要性は低くなってしまふ。ひいては、構成要素を必ずしも3つとも提示しない伝達方略の選択が生じると考えられる。

5. 聞き手からの構成要素の提示

次に、話し手が『助言』を行う以前に、実は聞き手の方から構成要素が提示されている場合を見てみる。すなわち、聞き手から望ましくない状況 *S1* が提示され、これを引き金として話し手が『助言』を遂行する場合である⁴。これには、次の(9)(10)のような例が該当する。

- (9) (台所で。Aは本を読んでいる。A=母 49才。B=娘 23才。)

(S1)→ A : 目が疲れてきた。

X→ B : 目薬入れたら？

S2→ 少しはちがうよ。

A : うん。(読みづづける)

- (10) (Outside Roseland. Marilyn walks to the bus stop to go home, and Russell accompanies her. "ROSELAND")

(S1)→ Marilyn : I guess I don't really like being on my own -- I, I mean, I like it in theory.

⁴ このような聞き手からの構成要素の提示は *S1* のみに関して生じ、*X*、*S2* に関しては論理的に生じ得ないとする。なぜならば、『助言』の遂行に際しては「当該行為を遂行しなければ、聞き手は *S2* を生み出す行為 *X* を行わない」と話し手は信じている」からである(熊取谷・村上 1992: 28)。すなわち、聞き手が既に望ましい状況 *S2* やそれを生み出すためにどのような行為 *X* を行えばよいかと言うことを認識しているならば、話し手が『助言』を遂行する必要性は生じない。

(8)

X→ Russell : Don't think so much.

Marilyn : Do you know what it's like sitting on your own all day
long? All day long ...

(9)(10)の場合、聞き手が話し手から『助言』を与えてもらうことを意識して当該発話を行ったか否かの判断は、ここからだけでは難しい。しかしながら、その意識の有無に拘わらず、聞き手の発話は引き金となり、結果として話し手からの『助言』を誘発していることが窺える。言い換えれば、このような聞き手から *S1* を提示する発話は、聞き手が『助言』を必要としていると話し手が判断する「文脈化の手がかり」('contextualization cue' cf. Gumperz 1982, 1992) として機能したと考えられる。

このような場合、話し手と聞き手の間には共通の現状認識が生み出されるため、相互作用を経て構成要素が確定される場合と同様、話し手が改めて「*S1* の提示」を行う必要性が低くなり、話し手がいきなり *X*もしくは *S2* を提示しても唐突さの印象は弱いと考えられる。

6. 話し手からの一方的な導入

ところで、現実の談話場面では、話し手が一方的に『助言』を提示する場合も少なくない。これには、単一の構成要素のみが提示される場合と、2つの要素が提示される場合がある⁵。順に検討していこう。

6.1 単一の構成要素の一方的な導入

次の(11)(12)は「*S1* の提示」、(13)は「*S2* の提示」、(14)は「*X*の提示」が、話し手から一方的に行われている例である。

(11) (図書室で。A、B=女、大学院生、友人。)

S1→ A : Bちゃん、ずれてる。ピンが右にずれてる。

B : ほんと? (直す)

(12) (Hotel room. Smith is sitting on the bed naked, watching
Baltimore take a cigarette. "MILLENNIUM")

S1→ Smith : You smoke too much.

⁵ 現実の談話においては、3つの構成要素が話し手・聞き手の間でやり取りなしに一方的に導入される場合は、非常に希で特別な場合と考えられる。

Baltimore : (*Looks at him, lights the sigarette, then sits in front of him*) I'll quit tomorrow.

Smith : Just like that, huh?

- (13) (Aは妻と出かけようとしている。ストーブのついていない寒い部屋からBが見送りに出てきた。A=父51才。B=娘19才。)

S2→ A : 座敷が温いけえ。

B : はい。

A : お母さん行くぞ。(玄関から出る)

B : (座敷に行く)

- (14) (Todd が Keating 先生の励ましで詩を暗唱し終わった後、クラス中で拍手が沸き上がる。"DEAD POETS' SOSIETY")

X→ Keating : Don't you forget this. (*Todd の額に自分の額を当てる*)

(11)~(14)のように、話し手が一方的に単一の構成要素を提示しただけで『助言』が成立する場合には、『助言』の遂行以前の問題として、話し手と聞き手が置かれているコンテキストには、共通の認識ないしは暗黙の前提が存在していると考えられる。例えば、(11)ではピンは普通まっすぐにつけるものという認識が、(12)では煙草の吸いすぎは体によくないという認識が、いわゆる常識として暗黙の前提になっていたと考えられる。また(13)では、聞き手 B がストーブのついていない寒い部屋にいるという望ましくない状況 S1 が話し手・聞き手の共通認識になっていたと考えられる。さらに(14)では、聞き手 (Todd) がそれまで何事にも臆病で自信がなかったという経緯があり、それが暗黙の前提となって、上記の行為指示が『助言』として成立したと考えられる。

また、次の(15)(16)のように、事態が急を要している場合にも、単一の構成要素が一方的に提示されやすくなる。

- (15) (路上の自動販売機でジュースを買っているとき、自転車が猛スピードで近づいてきた。A・B=女23才、友人。)

S1→ A : 自転車が来る!

B : (後ろを振り返って、前に一步立ち退く)

- (16) (谷本と茂夫、節子が就職のことについて話しているところへ、次郎が言いがかりをつけてきた。谷本=ヨット会社の社長。茂夫=節子の兄、谷本の会社へ就職が決まった。節子=パン屋の店員、谷本の養女に望まれている。次郎=節子と同じパン屋の職人。TV『私の兄さん』)

次郎：節子おまえは偉いよ。兄貴まで売り込んでな。

茂夫：（席から立ち上がりかける）

X→ 谷本：茂夫君、何も言わない方がいい。

茂夫：（再び席につく）

節子：あんまりだわ！

(15)での状況が、急を要することは説明するまでもなからう。同様の状況でよく用いられる「危ない！」は、同じ「S1の提示」でも慣用化された表現形式と言えよう。(16)では、聞き手（茂夫）が次郎の言葉に触発されて席を立ち上がりかけた行動から、話し手（谷本）は言い争いやけんかなどを予想し、それを防ぐために「Xの提示」を行ったと考えられる。けがや事故、言い争いなどが望ましくない状況であることは、一般的な共通認識であろう。

上記のような共通の認識ないしは暗黙の前提は、常識や一般的・普遍的真理に基づく度合が高くなればなるほど、『助言』表現として提示する必要性が低くなる。逆に、話し手独自の認識・判断への依存度が高い場合には、それを『助言』表現として提示する必要性が高くなると考えられる。

6.2 2つの構成要素の一方的な導入

最後に、話し手から一方的に2つの構成要素の組み合わせによる伝達方略が用いられる場合を見ておきたい。既に表1の結果にあったように、行為指示「Xの提示」に合わせて「S1」もしくは「S2」が提示される類型が頻用されていた。次の(17)(18)は「X+S1の提示」、(19)(20)は「X+S2の提示」の例である。

(17)（広報誌の編集者である佐保子とまゆみが、頼んでいた写真を取りに須藤の事務所へ来る。しかし彼はおらず、代わりに近藤がいる。TV『隣の人』）

近藤：あの一、あなた、須藤さんの恋人かなんかでいらっしゃいます？

佐保子：（少し言葉に詰まって）いいえ。

近藤：あ、いや、すいませんでした。急に仕事やる気になったもんだから、てっきりそうかなと思ったんですよ。

X→ でも、急いでるんだったらやめた方がいいと思いますよ。

S1→ あの人一、今、最低です。

佐保子：それ一、奥さんが亡くなったことと関係が？

(18) (Time machine car moves in reverse out drive way and car moves backward and stops. In front seat Marty and Jennifer on his lap hold one

another. Brown turns on switches overhead. "BACK TO THE FUTURE")

X→ Marty: Hey, Doc, we better back up,

S1→ We don't enough road to get up to eighty-eight.

Brown: Roads? Where we're going we don't need roads.

(19) (Bは郵便局で郵便物の仕分けのアルバイトを始めた。A＝中年男、郵便局員。B＝女 23 才、アルバイト。)

X→ A: ハガキからやりんさい。

S2→ やりやすいけえ⁶。

B: はい。(ハガキを仕分けし始める)

(20) (山道。駐車していたジープに Joan のバスがぶつかって動けなくなる。乗客はみんな歩き始めるが、Joan はどうしたらよいか分からず途方に暮れている。そこへ Zolo が近づく。"ROMANCING THE STONE")

X→ Zolo: You don't have to walk.

S2→ Another bus will come along.

Joan: What?

Zolo: (*looks at the departing passengers*) They know nothing.

They are peasants.

(17)～(20)では、「S1 の提示」もしくは「S2 の提示」が、それぞれ行為指示「Xの提示」を裏付ける根拠ないしは理由として機能していることがわかる。

というのも、行為指示という特徴は『命令』や『依頼』などにも共通するため (cf. Searle 1976)、「Xの提示」のみでは、行為Xが聞き手に利益をもたらすという認識・判断が聞き手に伝わらないこともありえる。しかし、これらを組み合わせて提示することによって、その意図がより明確に伝達可能になると考えられる。聞き手の側からすれば、単一の構成要素を提示されるよりも、複数提示される場合の方が、相手の意図を推測するのに容易なのは言うまでもなからう。話し手から一方的に『助言』が遂行される場合にはなおさらである。

これに対して、同じ 2 つの構成要素を組み合わせた類型「S1+S2 の提示」は、選択の度合いが非常に低かった。その原因としては、この 2 つの要素の組み合わせが上記のような因果関係の論理的構造とは異なり、望ましい状況対望ましくない状況という対比的な論理構造になっていること、また行為指示を欠くために『助言』表現が間接的になること、などの影響が考えられる。

⁶ 広島方言。それぞれ「ハガキからやりなさい。」「やりやすいから。」の意。

7. まとめ

以上、本稿では、『助言』表現の選択、および表現化されていない『助言』意図が話し手と聞き手の間でいかに認知されているかを、相互作用の過程とコンテキストに位置づける視点から、分析と考察を試みてきた。

ここで明らかになったことをまとめると、以下の2点になる。

①『助言』の7つの伝達方略は、均等に選択されているのではなく、特定の方略に片寄りがある。かつ、その傾向は日本語・英語ともに非常に似通っている。すなわち、最も頻繁に選択されたのは「 $X+S1$ の提示」であり、日本語・英語とも全体の3割前後を占めていた。これに続いたのが、日本語・英語とも「 X の提示」、「 $X+S2$ の提示」であった。

②『助言』が導入されるパターンには、大きく次の3つの場合がある。

- a) 話し手と聞き手の相互作用を前提とする場合
- b) 聞き手からの構成要素の提示を前提とする場合
- c) 話し手から一方的に導入する場合

すなわち、現実の談話場面では、話し手が『助言』意図を一方的に全て伝達するというよりも、むしろ聞き手との相互作用をも含めた刻々と変化するコンテキストに合わせて、主体的に表現を選択している現象が浮かび上がった。

この他に『助言』意図の伝達・認知には、イントネーションや韻律、声の大きさなどの音声的特徴や、顔の表情や身振りなどの非言語的特徴、対人関係などの要因が関わっていることが先行研究から予想される (cf. Gumperz 1982, 1992)。しかし、残念ながら今回の分析では扱えず、今後の課題として残す。

参考文献

- Flowerdew, John. (1990) 'Problems of Speech Act Theory From an Applied Perspective, *Language Learning*, 40, 1, 79-105.
- Gumperz, John J. (1982) *Discourse Strategies*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Gumperz, John J. (1992) 'Contextualization and Understanding,' In Alessandro Duranti and Charles Goodwin (eds.) *Rethinking Context*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 熊取谷哲夫 (1990) 「日英発話行為対照の枠組みを求めて」 *Conference Hand-book*, English Linguistic Society of Japan, 166-71.
- 熊取谷哲夫 (1993) 「発話行為の対照研究のための統合的アプローチ」『日本語教育』79, 26-40.

- 熊取谷哲夫 (1995) 「発話行為理論から見た依頼表現」『日本語学』14, 11, 12-21.
- 熊取谷哲夫・村上恵 (1992) 「表現類型に見る日本語の『助言』の伝達方略」『表現研究』55, 28-35.
- Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 村上恵 (1992) 『「助言」の談話構造』広島大学大学院提出修士論文 (未公開)
- Searle, John R. (1969) *Speech Acts*, Cambridge University Press, Cambridge. 坂本百大・土屋俊訳 (1986) 『言語行為』頸草書房
- Searle, John R. (1975) 'Indirect Speech Acts,' In Cole, Peter. and Morgan, Jerry L. (eds.) *Syntax and Semantics: Speech Acts* 3, Academic Press, New York, 56-82.
- Searle, John R. (1976) 'A classification of Illocutionary Acts,' *Language in Society*, 40, 2, 155-187.
- 山梨正明 (1986) 「法助動詞の語用論—発話の間接性と慣用性をめぐって—」『英語青年』131, 10, 19-21.

談話収集資料

<日本語のTVドラマ>

『妹の旅』『傷だらけの旅路』『君だけに愛を』『逆転・嫁と姑』『さよならを教えて』『しつこい先生のおかげです』『父の椅子』『隣の人』『熱血! 新入社員宣言』『花真珠』『花婿の父』『二人だけの…』『ホテル開業』『有情、無情、非人情2』『嫁・姑・婚約騒動』『理想の男性』『私の兄さん』(以上五十音順)

<英語の映画のビデオ>

"DEAD POETS' SOCIETY" "DAD"

<英語の映画のシナリオ>

『SCREENPLAY: WORKING GIRL』(1989)
 『SCREENPLAY: TUCKER THE MAN AND HIS DREAM』(1989)
 『SCREENPLAY: THE SECRET OF MY SUCCESS』(1989)
 『SCREENPLAY: BACK TO THE FUTURE』(1989)
 『SCREENPLAY: BACK TO THE FUTURE (PART II)』(1989)
 『SCREENPLAY: BACK TO THE FUTURE (PART III)』(1990)
 『SCREENPLAY: DRIVING MISS DAISY』(1991)

以上、いずれも フォーイン クリエイティブ プロダクツ編・発行
 『時事英語研究』(1984年4月号～1991年7月号) 研究社